

西田幾多郎の「行為的直観」 森田療法的アプローチからの分析

Concerning “Action-Intuition (koiteki-chokkan)” of NISHIDA Kitaro
From the viewpoint of Morita-therapeutic approach

大谷 孝行
OHTANI Takayuki

はじめに

西田幾多郎(1870~1945)の哲学において「行為的直観」という概念は西田の晩年の十余年間に頻繁に用いられる最重要概念の一つである。西田の処女作『善の研究』の中心概念である「純粹経験」と同様に、「行為的直観」は、それによって人間の本質がすべて解明されるような根本実在の意味をもつ。

本稿では、後期西田哲学の中心概念である「行為的直観」を、森田療法という精神療法の観点から考察するという試論である。西田の「行為的直観」と森田療法とを接続しようとする際、筆者にとって導きの糸となった西田の次の言葉がある。

「人間は人間自身によって生きるのではない、またそれが人間の本質でもない。人間は何処までも客観的なものに依存せなければならない。自己自身を越えたものにおいて自己の生命を有つ所に、人間というものがあるのである。」(1)

人間はそれが物であれ人であれ、自分以外の他物・他者との関係性においてしか、生きられない存在である。西田哲学も森田療法も、そのような人間の本質に立脚した哲学であり精神療法である。

森田療法は大正期に、精神科医森田正馬(1874~1938)によって創始された、神経症に対する精神療法である。森田療法の特徴は、神経症者が不安を「あるがまま」にしつつ、日常生活を決しておろそかにしないで意識を対象世界へ開いていく所にある。そして治療の過程で、神経症者が不安や苦悩の軽減を体験するだけでなく、自らの性格や人間性に対する洞察を深め、人間的成長を遂げることができる点にある。

一方、西田哲学における重要概念の変遷を見る時、「純粹経験」から「行為的直観」への展開には、人間をより真実の相、具体的な相で把握しようとする西田の態度が表れている。

神経症者が自らの神経症を克服していく過程は、自分の人間的未熟さ故に陥った隘路から脱却していく過程でもあり、それは人間というものをより深く理解していく過程でもある。普通の日常生活を送っていない神経症という状態を通してみることで、西田哲学の「行為的直観」という人間のあり方と生き方を照射し、一見難解と思われる西田哲学の思想を、神経症者が症状を克服していく自己成長という点から明らかにしてみようというのが筆者のねらいである。

[1] 哲学に対する西田の姿勢

西田幾多郎の人生を繙いてみると明らかな通り、彼は生涯で数多くの挫折や苦難を経験している。東京帝国大学の選科入学、卒業後の石川県の地方中学校への赴任といい、どう見ても順調なエリートコースとは言えない。結婚後は幾多郎の妻寿美に対する、父の得登による一方的な離縁宣告に悩み、さらには生涯設けた8人の子供のうち、5人に先立たれている。

西田は20代最後の2年間程、猛烈に禅修行に打ち込んでいるが、これは何よりもまず西田自身が苦しみの

多い自分の人生をいかに乗り越えるかという、止むに止まれない希求の心から出た行動であろう。世界の普遍的な構造を明らかにするというような論理的関心ももちろんだが、西田には自分が人生をどのように送るかという身近な問題が切実であった。そのような西田の姿勢を表す言葉を、いくつか彼の言から引用してみると、

「学問は畢竟 life の為なり、life は第一等の事なり、life なき学問は無用なり。」(2)

「涙を持ってパンを食うた事のない人の人生観はいか程価値のあるものであるか」(3)

「哲学の動機は『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならない」(4)

「日本の学徒は唯独逸の人の書物をよみそのやり方のみ込んで器用に用いるが本当に自分の心の底から真剣に命がけに考えるということがない。これではいつまでも模倣に終わるのみである。我々の生命の底から出た哲学ができる筈がない。」(5)

西田の哲学が現代でも読み継がれる理由の1つは、西田の哲学が西洋思想を単に紹介するといった借り物の哲学にとどまらずに、自身がまさに全身全霊で考え抜いた独創性にあるだろう。西田自身が常に哲学を、自身の実人生との往復運動で捉えようとした事が、西田哲学の魅力の一つを形成している。西田ほどの感受性と誠実さとをもった人間が、人生で前述したような苦しい体験を持てば、そのような体験が何らかのかたちで自らの哲学形成に影響を及ぼさないはずがないのである。

西田哲学を森田療法の観点から見るという意味がここにある。西田自身も苦しみ多き人生において、確固としたものをつかむべく参禅修行に没頭したり、次々と襲ってくる不幸や思想的課題に直面しながら自分の哲学を打ち出していった。したがって神経症者が人生において悩み、もがき、そうした体験を通じて、人間性の真実を深く自覚していくという有り様に照らして、西田哲学の基本概念をとらえ返すことができないかということである。

また、哲学者西田と精神療法家森田との間には、意外に共通点も多い。方や日本を代表する独創的哲学者であり、方や日本独自の精神療法の創始者であって、多くの優秀な弟子たちを輩出している。2人ともに**禅に対する旺盛な関心**をもち、若い頃には相当の挫折を経験している。

人生において出会う**「死」の問題**も、西田と森田が共通してもった関心事であった。西田は哲学の重要課題の一つを死の問題に対する解答と考え、森田は神経症の根本原因を「死の恐怖」と捉えた。

西田は言う。

「死の問題を解決するというのが人生の一大事である、死の事実の前には生は泡沫の如くである、死の問題を解決し得て、始めて真に生の意義を悟ることができる」(6)

西田が生涯で多くの肉親の死に直面したことは前述した通りである。一方で森田正馬も独り息子の正一郎や弟の徳弥を亡くしており、その時の森田の嘆き悲しみぶりは尋常ではなかったと言われる。森田は自分の精神療法の中核に「生の欲望」を据えたが、それは「死の恐怖」と表裏一体をなすものであった。神経症とは、患者が自らの「生の欲望」を外向きに発揮できずに、自己保身という内向きの「死の恐怖」にエネルギーが消費されている状態である。

ここでは、西田と森田がともに人生における「死の問題」を最重要視していることを確認するとどめるが、西田哲学も森田療法も、必ず死ぬ運命にありその運命を知っている人間が、人生をいかに生きるべきかについての方向性を示していることは指摘できるだろう。

人生の中から考えるという西田の哲学的姿勢を確認した上で、以下では西田の「純粹経験」と「行為的直観」という最重要概念に即して、その異同を神経症という観点から考察してみたい。

[2] 「純粹経験」と「行為的直観」

西田の処女作『善の研究』における中心概念は「純粹経験」である。「純粹経験」とは、我々が何らかの反

省を加えたり、判断によって対象を把握しようとする以前の、「未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している」(7)状態である。「物我相忘じ、物が我を動かすのでもなく、我が物を動かすのでもない、ただ一の世界、一の光景あるのみ」(8)であるのが純粹経験の境地である。

我々が何かに没頭している時、無我夢中である時、そこには「純粹経験」が現出している。あらゆる意識現象の基底的地平とも言えるこの「純粹経験」は、言語によって反省的につかめるものでも説明できるものでもない。ただ各人が自得すべきものであるとされる。

我々が反省的思想を交えずに、何かの体験に没入するという事態は、必ずしも芸術家や宗教家などの特異な体験に限らない。我々が歩くという動作一つとっても、我々は手足の動作や身体の傾斜角度を一々意識したり反省的に処理しようとせず、ただ歩こうと意志して歩いているだけである。一々の動作を意識的に行うのは、怪我からの回復時やリハビリ時、さらには自分の気になる1つ1つの動作を過度に意識的に行う神経症などの、むしろ正常でない場合の状態である。

西田の「純粹経験」は、森田療法で言う「なりきる」という事態と同一と考えてよい。自己内省的性格の強い神経症者は、森田療法の指導において、自分が今・ここで直面している現実「なりきる」ように言われる。雑念恐怖症者は雑念を持ちながらも当面の生活に「なりきる」。対人恐怖症者は緊張感を持ちつつも対人関係の場面で会話の内容に「なりきる」。何らかのことに「とらわれ」ている神経症者は、とらわれつつも、その不安・葛藤を排除しようとせず、とにかく直面している現実「なりきる」。神経症者に求められる姿勢は、手を休めて意識的に自己批判や自己反省をすることではなく、まずは直面している現実「なりきる」ことであり、ここから生活のすべてが始まるとしてよい。

森田療法で作業が重んじられ、特に身体を使って行動することが求められるのも、それが「なりきる」ことに比較的つながりやすいからである。何かに没入している時は文字どおり無我夢中であり、そこでは反省する自我は後退し、主・客合一という状態が実現されている。苦悩にとらわれていた神経症者が自分の「とらわれ」を忘れて何かに集中し、作業を遂行しているという状態が、神経症治療の一つの指標となることは間違いない。毎日の生活の中で、神経症で苦しんでいた時は多かった自己内省の時間が減っていき、それに代わって生活の行動に「なりきる」時間が増えていくことは、着実に自らの人生態度が建設的になっていくことだと評価できる。西田哲学に即して言えば、「純粹経験」が現れる時間が生活の中で多くなっていくということである。

それでは、森田療法による治療というのは、神経症者の不安の軽減や「なりきる」時間帯の増大といった、心理面における集中度の変化だけにとどまるのであろうか。筆者はそうではないと考える。不安の軽減や「なりきる」時間の増大という事実だけをとれば、それはおそらく薬物治療によっても可能なことだろう。また「なりきる」時間が増えたことだけを指標にしてしまうと、何でもいから集中すればよいということにもなるわけで、極端な話、悪事にひたすら励んで「なりきる」ことまで賞揚されかねない。つまり「なりきる」と言っても、何に「なりきる」のかという対象の性質が当然考慮に入らなければならない。

森田療法が薬物治療と異なる最大の点は、森田療法によって患者が自らの人間性を深く洞察し、人間としての自分をより広い視点で捉えられるようになることであろう。そうであるからこそ、森田療法によって神経症が治癒した神経症者たちは、自らが神経症になってよかったという感想さえもらすのである。

さて森田療法がもつ以上のような特質は、西田幾多郎が「純粹経験」という初期の哲学的立場を発展させ、後年に「行為的直観」という概念を打ち出したことを考える際、示唆的である。西田は昭和11年、『善の研究』の版を新たに作る際に、自らの「純粹経験」という立場を振り返って次のように言っている。

「今日から見れば、この書[『善の研究』のこと 引者注]の立場は意識の立場であり、心理主義的とも考えられるであろう。然非難せられても致^{しか}方^{いたしかた}はない。(中略)この書において直接経験の世界とか純粹経験の世界とかいったものは、今は歴史的事実の世界と考えるようになった。行為的直観の世界、ポイエシスの世界こそ真に純粹経験の世界であるのである。」(9)

つまり、「純粹経験」は確かに意識活動の根源的な地平として、意識活動の最重要なものである。主・客合一し、物我相忘れ、「なりきる」状態が実現している点では、我々人間にとって最も自己実現できている状態とも言えるであろう。しかし「純粹経験」の立場は、ある個人が一心不乱に活動しているという心理状態を描出すにとどまり、その個人がよって来るところの社会的・歴史的生成面を十全に展開しているとは言えず、自らが直面する現実と一体化している一個人の心理状態を初めから前提している。西田が後年、「純粹経験」の立場を心理主義的と位置づけたのも、人間をその時その時の心理状態だけから説明するのではなく、人間存在が根源的に帯びている社会性と歴史性を明らかにすることが、人間をより具体的な真実の相で捉えることであると考えたからに他ならない。

それでは西田の言う「行為的直観」とは、どのような概念であろうか。以下、検討してみよう。

一般には行為とは、主体が対象に対して能動的に働きかける動作を、直観とは受動的に何かを見るところといった感受作用と考えられがちである。しかし西田は言う。

「見るということと行為ということとは異なると考えられるが、見るということなくして行為というものはない。」(10)

「見るということは単に受動的ということではない、我々はいつも行為によって物を見るのである。然らざれば、唯、心像の如きものに過ぎない。」(11)

「眼で物を見るという時、唯受動的に映すのではなくして、手の運動と結合することによって外に物を見るのである。」(12)

パークリー（1685～1753）が、人間の視覚を触覚と結合させて、「見える」ということにすでに含まれている行為的要素を指摘したように、西田の「行為的直観」は行為と直観との相即性を表現している。したがって一見受動的に思われる「見える」ということにも常にすでに行為的要素が介在しているのであり、その意味でも「我々の自己は行為的でなければならない。行為する所に人間の存在があるのである。」(13)

そして行為にせよ直観にせよ、それは眼前の物の世界を離れて人間が徒手空拳で実現できる作用ではない。「行為的直観」は、意識的自己と対象界、物の世界とが不可分であり、意識的自己の働きは、物の世界と離れて無関係に働くわけではないということを示している。意識的自己が現実世界を無視して虚構を作り上げ、その虚構で苦しむのが神経症の特徴であるが、「行為的直観」とは、意識的自己が対象界と相即的にのみありうるというそのあり方を表明している。神経症者の場合であれば、神経症者が自分の観念的虚構性を打破する際に、自分を対象界の現実原則に従わせることを学ばねばならず、対象的世界を無視して肥大化してしまった自己の意識内界を、物の世界に今一度放り込むことが必要であるということになる。

「物はそれ自身において独立的なものであり、見られるものである。逆に我々を限定するものである。」(14)

「物は何処までも我に対立するものであり、我々が道具を以て物を作ることを私は技術といった。技術というのは単に主観に属するものではない。我が物の中に入ることである、物の働きが私の働きとなることである。」(15)

「考える」という営みさえも、実はデカルトが位置付けたような初めから対象世界から独立した実体でなく、あくまでも対象世界と相即的關係に立つものである。

「われわれはふつう、考えるということを考える主体が考えられる対象の前に孤独に存在するかのように設定して、そもそも考えるということはいかなることかというふうに抽象的に思惟するのであるが、われわれが考えるという場合、事實は決してこのようになるのではなく、われわれが具体的現実の只中において、それぞれの置かれた位置に応じて、環境に対応すべく考えざるをえないのである。つまり考えるということは客観的状况に応じてそれに促され、呼びかけられて応答することではなければならない。」(16)

しかしながら意識と対象界との相即性を指摘しただけでは、「行為的直観」は「純粹経験」と何ら変わらないことになる。人間の意識が物の世界に没入し、物になりきるという特徴は、西田が「純粹経験」の時点で

既に述べていたことである。「行為的直観」が「純粹経験」の立場と異なる最大の特徴は、前者が人間存在の根源的な社会性と歴史性を明らかにしようとしている点に求められるのである。

人間存在を社会性と歴史性において捉えること、つまり時間的にも空間的にも関係性の網の目として捉えることは、人間を具体的実相で捉えることであり、又、自己の閉鎖性・孤立性を打ち破ることである。西田の「行為的直観」にあつて「純粹経験」にはない視点、それは人間を歴史性と社会性において把握しようとする視点である。単に一個人の無我夢中、なりきっているという心理状態を描くだけではなく、自分の存在そのものが根源的に帯びている歴史性、社会性を自覚することである。人間を社会内存在、歴史内存在として捉える立場からは、個人の孤立的な営みはすべて抽象的な一断面として捉え返されることになるだろう。

それでは西田の「行為的直観」を、その歴史性・社会性という特質において鮮明化し、あわせてこれが森田療法的治療から見てどういう意味を伏在させているかを考察してみたい。

[3] 「行為的直観」の社会性と歴史性

西田の「行為的直観」は、「純粹経験」の立場では暗黙の前提とされていた意識的自己の社会性と歴史性を自覚的に捉え返した立場である。人間の営為は対象的世界との不断の交流において成立するが、その対象的世界が人間によって「**作られた**」ものでありながら、「作られた」ものは客観的に人間から独立するといった自立性をもつものであるために、それを足場にした歴史の連続性が保証されることになる。

「純粹経験」という境地では意識的自己がその対象に「なりきり」、一体化しているという状態が強調されたわけだが、その場合、対象はあくまでも「**与えられた**」ものとしてしか捉えられていない。ある個人がある時、ある場所である現実世界になりきり、主・客合一の状態が実現されていたとしても、その現実界は偶然与えられた所与のものであるにすぎない。

しかし「行為的直観」という立場では、この「与えられたものは作られたものでなければならない、現れたものは無限の歴史を有ったものでなければならない」(17) 我々のあらゆる行為は、歴史的に作られた世界の中で成立するのであり、一人一人の人間は好むと好まざるとに関わらず、歴史内存在でしかありようがない。「行為的直観」が歴史的事実であることを指摘して西田は次のように言う。

「従来の認識論の立場からは、知識は認識主観の形式によって構成せられ、これに対して与えられたものは単に質料的とか潜在的とか考える。直観といえ、唯、主客未分以前と考えられる。しかし知るということも働くということであり、働くというには足場というものがなければならない。足場となるものは何であるか。それはいつも行為的直観的に把握せられた現実の世界でなければならない。而してそういう世界というのは、歴史的に構成せられたものでなければならない、作られたものでなければならない。歴史の世界においては単に与えられたものというのではない。」(18)

「我々の行為はすべて歴史的出来事である。我々が行為によって物を見るということは、歴史的に物が現れることである。造られたものは我々の自己の作ったものではあるが、我々の自己を離れ、それ自身が歴史的世界に於てあり、歴史的世界に於て働くのである。」(19)

世界が本源的に帯びているこのような歴史性は、神経症者の生き方から見るとどのような意味をもつであろうか。神経症者は強すぎる不安・悩みのために、他者や生活上の行動に配慮する精神的余裕がない。不安や苦悩を解消することに急であつて、自分の存在そのものが根源的に他者によって支えられていることを顧みる余裕がない。自分が生きている現実世界が歴史的に構成され、自分の生活が他者と物によって支えられていることを深く自覚することは、神経症治療にとっては重要な意味を有するはずである。実際、**内観療法**は、自分が幼少時から他者によって支えられ続けてきたことを深く自覚させようとする精神療法であり、デイヴィッド・K・レイノルズ氏の提唱する「**建設的生き方**」は、自分が他者のみならず、物によって支えられていることも

自覚させ、感謝の気持ちを持つことの重要性を説いている。それは人間存在を歴史的・社会的存在として、時間軸・空間軸の広がりの中の結節点として捉えさせようとする試みであると言える。

森田療法が単なる不安の軽減のみを目指すものでなく、同時に患者の人間性への自覚、人間的成長も促す精神療法であると言えるのは、患者自身が人間存在を歴史的・社会的関係性において把握する能力を増大させるという意味を含んでいるのではないだろうか。俗に言えば、支えられてあることに対する自覚や感謝ということになる。そしてそれは西田が意識的の自己を、「純粹経験」として捉えることを超えて、歴史性と社会性の側面から「行為的直観」として捉えた視点と符合するのである。

森田療法では、神経症者は日常生活で直面している作業や仕事をよりよくこなすこと、工夫をもって行うように指導される。作業をする際も、単に眼前の対象界に集中するのではなく、いわば対象界からの呼び掛けに応ずるかの如く、工夫をめぐらして行動する。それはそもそも対象界・物の世界が無味乾燥な物質界ではなく、「表現」性を帯びたものとして我々の前に立ち現れてくるからである。

対象的世界の表現的性格について西田は次のように言う。

「行為的直観の立場においては、世界は表現的となる。」(20)

「歴史的現実の世界は表現的な物の世界であるのである、物的表現の世界であるのである。(中略)我々の行為は物的表現の世界から惹起せられるのである。そこに我々の行為的の自己があるのである。物が表現的に我に臨むということは、現在の我、与えられた我を否定すべく、我に迫ることである。我を動かすべく、我々の行為を惹起すべく、我々に臨むのである。」(21)

我々の身の周りを見回せばそこにあるのは物であり、物はすべて表現性を帯びた物として我々に立ち現れてくる。机は単なる木やスチールからなる塊ではなく、その上で作業できる道具としての机として立ち現れ、鉛筆はそれでて筆記するための道具としての相貌を帯びている。身の周りの世界は、何らかの用材性を帯びて我々にふさわしい行動をとるべく呼び掛ける。その呼び掛けに応じて、物の道具性 = 表現性をできるだけ実現してみせることが、森田療法で言う「物の性を尽くす」ことであろう。

物の表現性は、まさに「物の」表現性であって、意識主観が外から始めて対象界に表現性を付加するようなものではない。

「表現といえば、すぐ主観的とのみ考えるのが誤である。表現することは形成することである、歴史的実在の世界において行為的に形成することである。歴史的実在の世界において、物が現れることである。」(22)

我々が普段何気なく行っている1つ1つの行動すべてが、**表現性を帯びた世界への応答**という意味をもって、世界からのそのような呼びかけに絶えず応答することが、我々が生きるということである。

「創造的要素として身体的に見る私に対しては、世界は表現的となる。物は生命の表現として現れる。表現が我を動かすというのは、かかる立場においていい得るのである。」(23)

我々が対象世界と関わろうとする際、対象世界は確固とした法則性と秩序をそなえたものとして立ち現れてくる。そして自分の意識からは端的に独立し、それ自身の客観性を備える**物の存立性**をしっかりと認めること、自分とは違うという**他者の存立性**を認めることは、神経症治療に重要な意味を持つと思われる。

神経症者は一般に理想が高く、自分の精神内界にせよ外界にせよ、自らの思い通りにしたいという空想的万能感をもっている。しかし人生の現実には自分の思い通りにならないこと、自分に否定的に立ち現れるものは、それこそ無数にある。神経症者が自分にとって「できること」と「できないこと」とを見極めることは、森田療法の治療プロセスにおいて重要な意味をもつが、その場合の「できないこと」とはそれ自身の存立性と法則性をもって、神経症者にとっては思い通りにならない否定的なものである。

それでは以下においては人間の意識にとって否定的に現れるものについて、西田哲学に即しつつ、神経症の治療から見た場合の、その意義を考察してみたい。

[4] 意識にとっての「否定性」

森田療法では神経症者は身体を使って作業をするように指導される。できるだけ五感を総動員しつつ日常生活に向かっていくのは、それが単に不安から目をそらせる、不安を紛らわすということ以上の意味をもつように筆者には思われる。それは現実界から遊離して自己の主観的想念の中で不断に虚構を紡ぎ出す神経症者に、手応えのある現実世界を確認させようとする意味をもっている。森田が「事実唯真」という語に込めた思いには、確固とした日常の現実世界の存立性を、まずは事実として認めるという意味がある。

一方、哲学者の西田幾多郎は人間の意識的自己に対して立ち現れる**物の存立性**を次のように言う。

「物とは如何なるものであるか。物とは我々の運動に抵抗するものと考えられる、我々の運動を否定するものと考えられる。」(24)

「我々が物を見るというも、物は我々の運動の抵抗として見られるのである。眼の筋肉の運動というものなくして物の形というものは見られない。知覚の世界というのは我々の意識に映されたる平面図の如きものではなくして、立体的でなければならない、否それ自身の重さを有っていなければならない、我々の生命を限定する意味を有ったものでなければならない。我々が知覚の世界を実在的と考えるのはこれによるのである。」(25)

我々がこの現実世界で生きていくことは、不断に抵抗に会い、自己の空想的観念性を否定されることである。我々の意識からは端的に独立し、それ自身の存立性をもつ「物」の世界を認めること、意識に抵抗して立ち現れるものを認めることが、まずは生きていく上での必須条件である。

「我々は我々に対立する或物を認めなければならない。それを認めることが我々が生きることである。」(26)

我々が労働し何かを作り出すことも、自分の眼前に自立的な物を生産することである。生み出された物は、それを生んだ人間の意識的自己からは端的に自立するからこそ、それを足場にした人間のあらゆる営為が可能になるのであり、歴史の連続性が保証されるのである。

「歴史的現実の世界は制作の世界、創造の世界である。制作というのは我々が物を作ることであるが、物は我々によって作られたものでありながら、何処までも自立的なものとして逆に我々を動かす、しかのみならず我々の物を作る働きそのものが固、物の世界から生まれるのである。(中略)而して斯く我々が歴史的制作的なる所に、我々の真の我というものがあるのである。」(27)

日常生活において我々を取り巻く物の世界、手応えのある現実、眼で見、手で触れうる現実こそが、人間のすべての活動の原初であり基盤である。自らの主観的内界で葛藤し、虚構を肥大化させてしまいがちな神経症者にとって、まず自分の生きる立脚点を探ろうとすれば、それは手応えのある物に囲まれた周囲の現実世界であろう。人間の行動は、すべてここを出発点とし、ここを拠り所としている。

「行為というのは、我々が物の世界に於てあるから起るのである。行為の起るには、物がなければならない。物は考えられたものでなく、見られるものでなければならない。歴史的に形成せられたものとして現れたものでなければならない。」(28)

自分が生み出した物は、自分のプランや想念に従って作り出したものではあるが、それを生んだ意識的自己からは端的に自立した客観性を獲得している。物が物としてもっている、この客観性と自立性を認めること、物が我々意識的自己に否定的に抵抗として立ち現れるのを認めることは、我々がこの現実で生きることの不可欠な一部をなしている。真の意味で人間が自己成長を遂げるためには、自己に否定的に現れる他者(それは物であれ、人であれ)の存立性をまずは認めることが必要である。抵抗を感じない所、他者性の全くない所には、現実世界とかけ離れた空想的万能感や主観的虚構の世界が肥大化してしまうであろう。神経症者が自らの主観的虚構性を打ち破っていく方法は、やはり現実世界へと自分を開き、眼で見え手で触れる現実世界の存立性を身をもって確かめていくことだろう。我々人間にとって生きる足場は、ここ以外にはないのである。

[5] 世界内存在としての人間

神経症者が症状から解放されていくプロセスは、神経症者の閉鎖性、虚構性が打ち破られていくプロセスであり、自らが固定的に実体化させてしまっている主観的枠組が流動化していく過程である。

神経症者は現実生活での不適応のために自分の内界にこもりがちになるが、そもそも意識的自己が現実世界と切り離されて別個に存在するわけではない。意識的自己は自分の眼前に、自分からは独立した客観的な物を見るが、眼前の物も、それを見る意識的自己も、実は広義の「世界」において存在するというのが、哲学者西田の思想である。考える自我と対象としての客観世界とを二分するデカルト流の発想を、西田は初期の『善の研究』以来、一貫してとっていない。物は意識的自己からは端的に独立した存在ではあるが、しかし物も意識的自己も、その根源的なところで同じ世界の一部を構成する要素としてつながっている。物も意識も、ともに**世界内存在**なのである。西田は言う。

「我々は世界の外から世界を考えるのではなく、考える私も世界の中にあるのである。」(29)

「我々は如何に働いても、世界の外に出ることはできない。」(30)

「我々は道具を以て物を作る。しかし物はこの世界において独立するものであり、また我々を限定するものである。我々もまたこの世界から造られたものである。我々は歴史的世界において物を創造する、しかし我々もまた歴史的世界から創造せられたものである。それが世界が世界自身を限定するということであり、我々が物を見るということである。」(31)

「真の直観ということは、普通考えられるように、単に自己が自己を失うとか、物と我とが一となるとかいうことではない。自己が創造的となることである。自己が創造的となるということは、自己が世界から離れることではない、自己が創造的世界の作業的要素となることである。」(32)

西田は人間を世界内存在として捉え、個々人はたとえ本人が無自覚的にせよ、世界を「つくる」営みに参与すると同時に、世界によって「つくられる」存在であると考え、世界もまた、人間を「つくる」ものであると同時に、人間によって「つくられる」。人間と世界との間には、このように互いが互いを「つくり」、「つくられる」関係が成り立つ。そして考え認識する自我も、行動する自我も、その動きは決して対象的世界と無縁に起こるのではない。すべてが世界において起こり、世界を足場に生じる。

「(しかし) 認識作用といっても、世界の外から世界を知ることではない。知的自己といっても、単なる眼の如く世界の外から世界を見ているのではない。認識作用というのも、上にいった如く作られたものから作るものへという歴史的形成作用の極限において成立するのである。それ自身が歴史的形成作用なのである。動く世界の中において、動くことによって知るのである。」(33)

以上のように意識的自己の認識や行為は、世界の運動の一コマとして位置付けられる。自分の主観的行為も、世界という大なるものを作る行為であるが、行動するこの身体や自分の思いそのものが実は世界によって作られたものである。

自分という一個の存在を超える「世界」という視点を西田は提示しているが、こうした発想は森田にも共通して存在している視点である。筆者は**森田の中にある汎自然主義**について述べたことがあるが(34)、森田の言う「自然」も又、単なる山川草木という意味を超えて、人間のあらゆる活動がそこで展開されるところの大なる自然である。用語は異なるにせよ、個人のあらゆる行動がそこにおいて起こる足場、一個人の主観を超える大なるものという点では、西田の言う「世界」も森田の「自然」も共通の性質をもっている。

さて森田療法では不安を持ちながらも、できる限り身体を使って現実世界と交流することを指導する。身体を使って現実と交流しあうことは、何かと自分の主観に閉じこもりがちな神経症者の閉鎖性を破るという意味をもつ。森田療法では神経症は「頭で治すのではなく身体で治す」と言われ、不安をもちながらもとにかく身体を使って現実界と交流し、自己を開放していくことが図られる。では「身体」を使うとはそもそもどういう意

味を持つのか。身体の位置付けを哲学者の西田に即して考えてみると、どのようになるであろうか。西田は言う。

「我々の身体というものも作られたものであるとともに作るものである、見られるものであるとともに見るものである。」(35)

「我々の身体というものは歴史的に作られたものである、何処までも決定せられたものである。しかしまた作るものである。作られたものと作るものとの矛盾的自己同一である。そこに我々の自己というものがあるのである。我々が働くというには、身体を通さなければならない。」(36)

ここに表明されている西田の身体観は、**身体が本源的に帯びているその歴史性**である。現代の生命科学ならば、人間の身体的设计図であるDNAの出自を、38億年前からの生命の発生にまでさかのぼることであろう。人間の身体は環境に働きかけ環境を改変すると同時に、人間身体は環境によって働きかけられ環境によって作られる。自分の身体は本人が知ろうが知るまいが、歴史性において働いている。現在の状態だけを考えれば、物体とも見えるこの身体は、その背後に膨大な歴史的時間の経過と、過去の生命体と地球環境との相互の働きかけを伏在させている。

一方、この歴史的な身体が働きかける現実界もまた、一朝一夕にできあがった対象世界でなない。膨大な歴史を凝縮させた歴史的構成物である。例えば眼前の一本の鉛筆でさえも、そこには素材としての木材の生成、積み重ねられた製造法の蓄積等、が凝縮している。

我々は歴史的な身体でもって歴史的現実に向き合い、働きかける。その歴史的現実界は前述したごとく、無味乾燥な物質界でなく、常に我々の行為を誘うべく表現的である。

「多く人は世界を唯対象的に見ているから、表現というものを単に主観的と考えるのであるが、我々が作業的要素として世界の中にあり、世界の内において働くとき、世界は表現的でなければならない。世界は歴史的な生命の自己表現であり、我々の身体的自己はその要素である。」(37)

「(しかし)客観的表現が表現的作用的に我々の行為を惹起するのである。その故に身体というものがあるのである。」(38)

「身心脱落ということは、単に空となることではない。創造的要素として身体的に見る私に対しては、世界は表現的となる。物は生命の表現として現れる。表現が我を動かすというのは、かかる立場においていい得るのである。」(39)

世界そのものが我々に表現的に立ち現れるからこそ、我々は物によって誘われ、動かされる。世界が表現性を本源的に帯びているからこそ、我々は世界に働きかける。表現性ということを通じて、世界と意識的自己との間で不断のやりとりが実現される。表現というのは、無味・中立的な物的対象界に、外から意識的自己が主観的な意味付与をおこなうのではない。形容詞は人間の主観内にあるのではなく、世界そのものが形容詞的なのである。人間が自らの身体を使って作業をすることは、自らに表現的に立ち現れる世界を、さらに何らかのかたちで作りかえるべく、表現的に関わり合おうとする創造的態度なのである。

森田療法で身体を使った作業が重視されるのも、作業が以上のように、一個人の主観をはるかに越えた歴史性と表現性によってはじめて実現可能な行為であり、神経症者は作業を通じて知らず知らずのうちに、自らの主観的閉塞性を越え出るからなのではないだろうか。日常生活の何の変哲もない行動や作業が、このような奥深さをもっていることを知ることは、神経症者に限らず正常な人間にとっても、決して無意味なことではないだろう。一見難解な西田の哲学は、神経症者の森田療法的治療という観点から見た時、大いなる示唆に富む内容を内含しているように筆者には思われる。

註

- (1) 『西田幾多郎全集』(岩波書店、以下『全集』と略記。)9巻、p.61(以下、9・61と略記)、なお『全集』での旧漢字と旧仮名遣いは当用漢字と新仮名遣いに適宜改めた。
『西田幾多郎哲学論集』(岩波文庫版、以下『哲学論集』と略記。)所収論文「人間の存在」p.393。
- (2) 『全集』17・74。
- (3) 『全集』18・143。
- (4) 『全集』6・116。
- (5) 『全集』18・489。
- (6) 『全集』1・419。
- (7) 『全集』1・9。『善の研究』(岩波文庫版、以下『善の研究』と略記。)p.13。
- (8) 『全集』1・43。『善の研究』p.54。
- (9) 『全集』1・6。『善の研究』p.6。
- (10) 『全集』8・296。『哲学論集』所収論文「論理と生命」p.201
- (11) 『全集』8・323。「論理と生命」p.228。
- (12) 『全集』8・323。「論理と生命」p.228。
- (13) 『全集』8・295。「論理と生命」p.200。
- (14) 『全集』8・319。「論理と生命」p.224。
- (15) 『全集』8・297。「論理と生命」p.202。
- (16) 鈴木亨著『西田幾多郎の世界』勁草書房 pp.67~68。
- (17) 『全集』8・554。『哲学論集』所収論文「行為的直観」p.314。
- (18) 『全集』8・557~558。「行為的直観」p.318。
- (19) 『全集』8・229。「論理と生命」p.204。
- (20) 『全集』8・349。「論理と生命」p.254。
- (21) 『全集』9・33。「人間の存在」p.364。
- (22) 『全集』8・389。「論理と生命」p.295。
- (23) 『全集』8・345~346。「論理と生命」p.251。
- (24) 『全集』8・279。「論理と生命」p.183。
- (25) 『全集』7・357。『哲学論集』所収論文「弁証法的な一般者としての世界」p.99。
- (26) 『全集』8・378。「論理と生命」p.283。
- (27) 『全集』9・9。「人間の存在」p.339。
- (28) 『全集』8・543。「行為的直観」p.303。
- (29) 『全集』8・269。「論理と生命」p.174。
- (30) 『全集』8・313。「論理と生命」p.218。
- (31) 『全集』8・322~323。「論理と生命」p.227。
- (32) 『全集』8・341。「論理と生命」pp.246~247。
- (33) 『全集』9・36。「人間の存在」p.367。
- (34) 「富山国際大学人文社会学部紀要」第2巻所収の拙論「森田療法における自然観」。
- (35) 『全集』8・547。「行為的直観」p.308。
- (36) 『全集』8・559。「行為的直観」p.319。
- (37) 『全集』8・347。「論理と生命」pp.252~253。
- (38) 『全集』9・23。「人間の存在」p.353。

(3 9) 『全集』 8・345～346。「論理と生命」p.251。